



タンチョウがつなく人の繋がり

理事長 百瀬邦和

サロベツ湿原は釧路湿原に次ぐ日本で二番目に広い湿原であり、道北に分布を広げたタンチョウが最初に繁殖を始めたところです。NPO法人サロベツ・エコ・ネットワークは、昨年、「豊富タンチョウ勉強会～宗谷にやってきたタンチョウ～」を開催しました。そして本誌でも紹介しておりますが、今秋、道北で初めてタンチョウに標識することに成功しました。同様の取り組みは、昨年からおホーツク海側の浜頓別でも始まっています。さらに今年は、昨年足寄町で足環をつけた若い(1歳の)タンチョウが、今年はサロベツ湿原を含む道北地方で越夏し、この個体を巡って何人もの人が情報を交換しあい、タンチョウを仲立ちとした人の輪が広がりました。

道北の豊かな自然景観とそこに住む生き物たちは北海道が誇るかけがえのない財産です。さらに、そこにタンチョウが加わることで、より多くの人たちが道北の自然に関心を深められるとすれば、それこそがタンチョウのワイズユースとも言えるのではないのでしょうか。

今年は環境省が道央での標識調査を企画し、その前提及び準備として地元の人やグループの理解と協力体制を進めてきました。道央での今年の標識調査は残念ながら成功しませんでした。調査を進める中で関係者が連絡を取り合い、地元グループの連携が進んでいけば、将来的なタンチョウ保護のための礎になっていくでしょう。

ヨーロッパでは標識したツルの情報交換を主なパイプとして、各国のツルのファンが集う「ヨーロッパ・ツル・ワーキンググループ」ができており、3-4年毎に現場の町や村に集まって交流しています。ある年の議論の最後に、ヨーロッパでは数十万羽にまでツル(クロヅル)が増えてきたのに、その保護について話し合う意味があるのか、といった意見が出たことがありました。「そんなことはどうでも良いじゃないか、みんなツルが好きなんだから！」という話とその場を収めたのですが、それこそがツルの持っている魅力、そして価値なのだと思得したものです。

巻頭言	・・・ 1
RCC2021年活動中間報告	・・・ 2
宗谷地方で繁殖する タンチョウの調査	・・・ 3
タンチョウの新常識	・・・ 4
標識されたタンチョウの データ整理から分かってきたこと <その2>	・・・ 6
<連載> 鳥と自然と人⑩	・・・ 7
<活動記録>	・・・ 8

タンチョウ保護研究グループ 2021年度 活動中間報告

* 繁殖状況調査

十勝地方で飛行調査と補足の地上調査を行いました。飛行調査は4月23日と24日の2日間行い、就巢中の78つがいとヒナ連れの1家族を確認しました。

また補足調査として、十勝地方北部の新得町、足寄町、陸別町でドローンによる地上調査を行いました。これに調査協力者から得られた情報を合わせると、2021年に十勝地方で確認できた繁殖つがい数は88となりました。昨年確認した繁殖つがい数は93でしたから、十勝全域では繁殖つがい数が少し減ったこととなります。



道営十勝牧場で初めて確認された巣

この要因として考えられるのは、飛行調査の直前に十勝地方をみまった例年になく大雨です。これが雪解け水と重なり、豊頃町周辺では十勝川の水位が一時2mまであがる洪水が起きたため、十勝川中下流域のタンチョウの営巣地が水没し、就巢していたつがいが巣を放棄したと思われます。飛行調査では、例年の営巣地付近に巣を離れたと思われるつがいが観察できました。また後日の地上調査で確認数が多かったのは、再営巣したつがいが含まれていたためですが、今年の繁殖を完全にあきらめたつがいもいました。新規の繁殖地としては、長年営巣地点が見つからなかった道営十勝牧場で初めて営巣を確認できました（写真）。

* 標識調査

今年の標識調査は、6月19日～7月18日、8月9日の合計14日間行い、23羽のヒナに標識しました。

調査には、74名、のべ182人の方々がボランティアで参加してくださいました。昨年よりもやや遅めに調査を開始しましたが、十勝地方では、飛行調査の際に見られた洪水の影響で発見されるヒナの数少なく、さらに見つかったヒナもやや小さ目でした。一方の釧路・根室地方は、ヒナの生育も例年通りおおむね順調でした。



今年から足環番号が400番台になりました

今年は環境省と現地グループからの要請があり、道央地域での標識調査を検討しました。厚真町とえりも町で標識調査を行いました。残念ながら成功しませんでした。

今年も採取した血液によるヒナの性別判定を、本法人顧問 酪農学園大学 寺岡宏樹教授と同研究室の河崎恵里香さんをお願いし、メス11羽、オス12羽という結果をいただいています。

また、10月29日～11月1日には豊富町（サロベツ）において、NPO法人サロベツ・エコ・ネットワークのタンチョウ標識調査に参加し、協力しました。

宗谷地方で繁殖するタンチョウの 渡り経路の解明に向けた調査が始められました

2000年代に入り北海道のタンチョウの生息域が、道東から北海道全域へと拡がり始めましたが、宗谷地方では2002年にサロベツでタンチョウの越夏が、2004年に繁殖が初めて確認されました。

宗谷地方におけるタンチョウの繁殖地はサロベツ(=豊富町)から稚内市・猿払村・浜頓別町・枝幸町に広がり、2020年には15つがいほどの滞在が確認されています。しかしながら、道北地方のタンチョウの繁殖地や越冬地への移動経路、越冬地は明らかになっていません。唯一、足環が付いている枝幸の個体が十勝地方の幕別町で越冬しているということが解っているだけです。



写真 タンチョウ親子と無双網 (豊富町)サロベツ・エコ・ネットワーク 提供

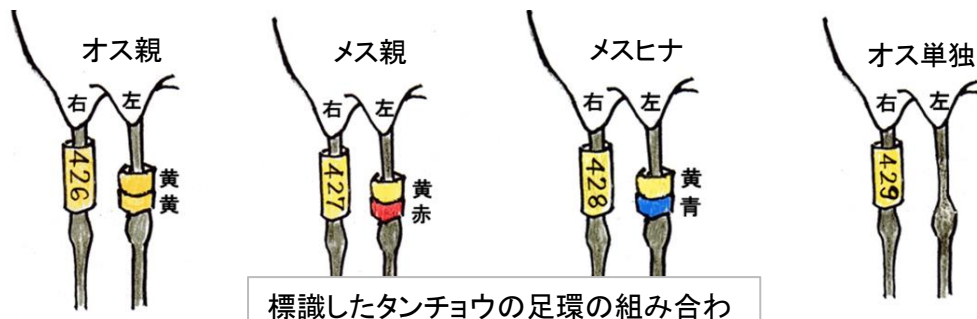
今年度、NPO法人サロベツ・エコ・ネットワークが、サロベツのタンチョウの渡り経路や越冬地を明らかにする調査を始めました。このNPO法人は道北の利尻礼文サロベツ国立公園にあるサロベツ湿原センターの管理、鳥類等の保全事業、地域活動、環境教育などを実施している団体です。同法人は経団連自然保護基金の助成金を利用して、環境省と共同で、豊富町に生息しているタンチョウ1羽に発信器と足環を、別の3羽に足環を装着しましたので、その様子をご報告します。

サロベツ・エコ・ネットワークのこれまでの調査で、豊富町内には秋にタンチョウが集まることわかっているデントコーン畑があり、今シーズンも若い個体1羽と、親子(成鳥2羽・ヒナ1羽)が現れていました(写真)。今年の10月30日にこの親子3羽を捕獲し、発信器を1個体に、足環(環境省リング)とカラーリングを全3個体に装着しました。このあと若い個体がまだ残っていたため、11月22日にこの個体にも足環(環境省リングのみ)を装着しました。

今回の捕獲には大型の無双網を使用し、捕獲と発信器・足環の装着にはバンダー(鳥類標識調査員)の原拓史氏とタンチョウ保護研究グループの百瀬が協力しました。11月23日現在これらの個体はまだサロベツに滞在していますが、12月になれば道東地方に渡って行くものと考えられます。いつ経路で渡るのか、どこで越冬するのか、来年はどのようにサロベツに渡ってくるのかなどが明らかになるなどのようなことが期待されます。もしこれらの個体をどこかで見かけましたら、タンチョウ保護研究グループまでお知らせ下さいませようお願いします。(この記事はサロベツ・エコ・ネットワーク事務局長長谷部氏のレポートを参考に、RCC事務局がまとめました。)

サロベツ湿原で標識したタンチョウ

リング	性別	家族構成		備考
426	オス	家族	親	左足にカラーリング(黄・黄) GPS発信器装着
427	メス		親	左足にカラーリング装着(黄・赤)
428	メス		ヒナ	426、427の子供、左足にカラーリング装着(黄・青)
429	オス	単独	亜成鳥	単独で行動



標識したタンチョウの足環の組み合わせ

タンチョウの新常識（トリヴィア） <第三回 タンチョウの埒について>

タンチョウは、冬の北海道では凍結しない浅い川や湧水地などでねぐらをとるとされています。実際に多くの写真集で、真冬の早朝にシバレタ!! 川のねぐらの中で目覚めたばかりのタンチョウの群れや、背に頭を入れてまだ眠っているタンチョウの様子が紹介されていますし、日没前後になると釧路地方にある給餌場周辺では、飛び立ったタンチョウの群れがねぐら入りのために川に降りていく姿をみることができます。

これまでに度々会報で紹介してきた、2017年に国後島で発信器を付けたタンチョウのBelaya(ベラヤ)ですが、2020年から2021年にかけて、冬のねぐらでとても興味深い行動をとりました。以下にベラヤの発信器から得られた記録をまとめます。

ベラヤは、夏の繁殖期を国後島で、春と秋を別海町東部の酪農地帯で過ごし、冬は標茶町に移動して釧路川で越冬していました。ところが2020年から2021年の冬は移動せずに別海町に残ったのです。

別海町での初めての冬をベラヤはどのように過ごしたかということ、年末まで主に小規模な川でねぐらをとっていました。ところが、2021年の新年早々にねぐらの場所が牧草地に変わりました。牧草地といっても、冬になればなにもない雪原です。地図や衛星写真でねぐらの場所を確認してみましたが、林に囲まれた小高い丘の牧草地で、遊水池や水溜りのできそうなくぼ地などはどこにも見当たりません。しかしながら発信器のGPSが示した場所は、雪原の牧草地のど真ん中でした。謎が解けないままだったので、日中のベラヤがいない時間を狙って、牧草地周辺にドローンを飛ばして確認しましたが、やはりただの雪原でした（写真）。



この牧草地は100m×200m程で牧草地としては狭く、比較的背の高い林に囲まれているので風を避ける効果はありそうです。ベラヤは1月初旬から3月半ばまで継続してほぼ毎夜ここをねぐらに使っていましたので、少なくともベラヤにとっては例外的な一時的なねぐらではありません。また、ベラヤは

前年まで3シーズン続けて標茶町の釧路川をねぐらにしていたから、ねぐら選びの嗜好性が特別変わった個体であるというわけでもなさそうです。もしかしたら、新しくなったつがいの相手が特別なかもしれませんが・・・。

大陸にいるタンチョウの最大の越冬地である朝鮮半島中部の鉄原平野では、軍事境界線付近にある結氷した溜池の真ん中がタンチョウのねぐらの一つになっている、と現場を案内されたことがあります。当然氷の上でした。タンチョウの冬ねぐらとして不凍の浅い水の中というのは必須条件ではない、とベラヤは教えてくれたのかもしれませんが。

標識されたタンチョウのデータ整理から分かってきたこと <その2> 子育てに成功するのは、たったの1/3?! 井上 雅子

まず、前回（Tancho 第43号）の記述に誤りがありました。

「ハマオ」（T73）の子育て成功数を、14回17羽としました（6ページ、表1）が、2005年に性別不明1羽の子育てに成功している一方、2017年の子メス2羽のうちの1羽「312」がカウント前に死亡しているため算入できません。したがって「ハマオ」の子育て成功数は15回17羽（メス7、オス4、不明6）となります。また、7ページ上から3行目で、T25が「ハマオ」と同数の子育てに成功している、と書きましたが、T25の子のうちカウント前に1羽が死亡しているため子育て成功数は16羽となり、今のところオスの中では「ハマオ」が最多の子育てに成功したことになります。お詫びして訂正いたします。子育て成功数の多い上位5位は次の通りです。

順位	性別	個体名	成功回数	成功羽数	生年	死亡年	生存
1	メス	T43	15	19	1992	2019	
2	オス	T73 (ハマオ)	15	17	1994	2020	
3	オス	T25	14	16	1991	2020	
4	オス	T63	12	14	1994		○
5※	メス	T69	10	13	1994		○
	メス	002	9	13	2005		○

※この表では、成功羽数の多い順に並べましたが、成功回数の多い順に並べると、11回(11羽)の子育てに成功しているメス15V(1997～)が5位になります。

さて今回は、1度でも子育てに成功したことのあるタンチョウは、メスのうちの41%（103羽）、オスでは34%（80羽）しかいないという話です。実に残りの2/3近くは子育てに成功することなく死亡したか、まだ子育てに成功していないのです。おそらくは毎年たくさんの番いが営巢し、ヒナを孵しているはずですが、カウントまで生き残る子はとても少ないのです。

1988年から始まった標識事業では、2020年までの33年間に650羽近いタンチョウに足環を付けてきました。このうち「野生下で繁殖」し、「性別も年齢もわかっている」タンチョウは、オス286羽、メス301羽、計587羽です。今のところメスの方が少し多いのですが、長い目で見れば、オス・メスほぼ同数になると思われます。また、ここでは飼育下で繁殖した（および、ヒナで保護され飼育下で育てられた）のちに放鳥されたものは除外しています。

そして587羽のうち、6～7月に足環を付けてから翌年の冬のカウント（総数調査）までに、オス53羽、メス47羽が死亡していることがわかっています。「タンチョウの総数」という場合、冬のカウント時の数が基本になるので、ここでもこれらを差し引いたオス233羽(=286-53)、メス254羽(=301-47)から話を始めることにします（前述の子育て成功率も、この数を分母として割り出したものです）。

図1に、各年齢の個体数を示します。年齢ごとにオスとメスそれぞれ何羽いるか(いたか)、現在生きている数と過去にその年齢で生きていた数の合計で、年齢と共に数が減っていくのがわかります。

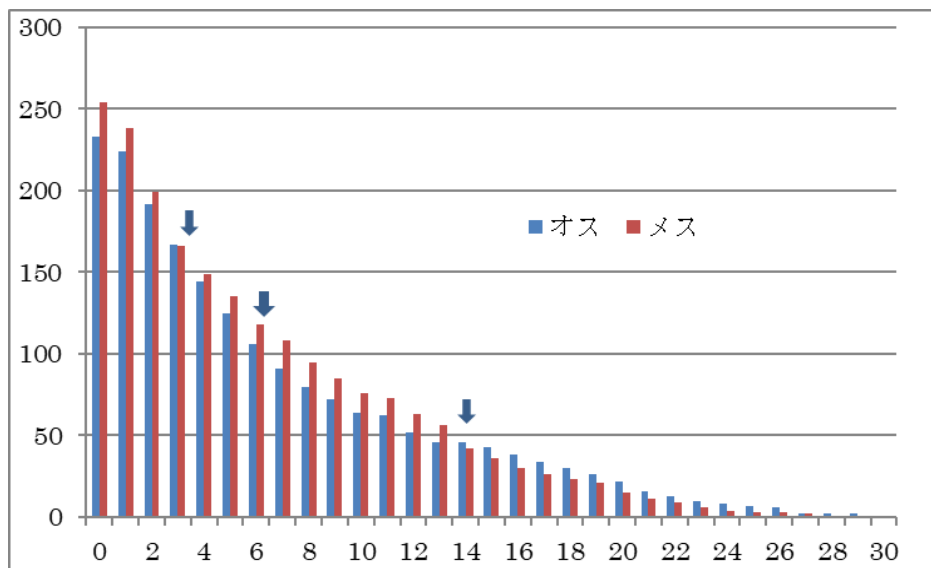


図1. 各年齢の個体数

この減り方の中で、筆者は3点に注目しています。1つ目は3歳のメスがオスよりも一旦少なくなること、2つ目は6歳でオスもメスも最初の数の半分になること、3つ目が14歳以降はオスの方がメスよりも多いということです。メスの方がオスよりも死ぬのが早い、つまりメスの消耗が激しく、それが子育てと関係しているのではないかと思います。3歳というのは、オスもメスも繁殖が始まる年齢です（繁殖年齢についてはancho第4号3ページをご覧ください）。

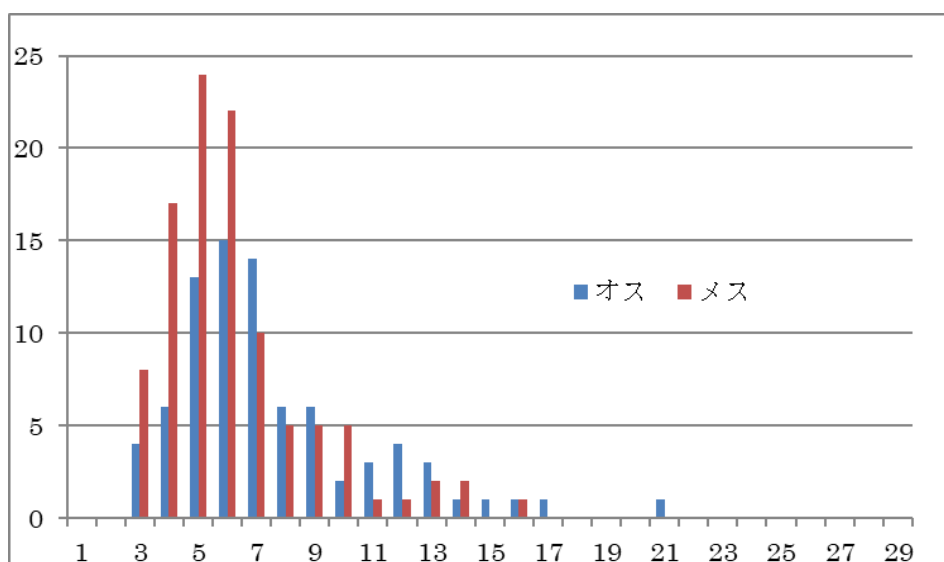


図2. 何歳で最初の子育てに成功したか？

図2には、「何歳で最初の子育てに成功したか？」を示します。オスに比べて、メスは早くから子育てに成功していることがわかります。一方、オスでは年齢が高くなっても子育てに成功する場合があります。そして、オスでは平均3.1回、メスでは平均3.6回の子育てに成功し、死んでいくこともわかっていて、ここでもメスの子育ての熱心さを見る思いがします。メスが早く死亡することから、配偶者を亡くしたオスと若いメスが出会えばすぐにも子育てに成功できるのでしょう。同様に、配偶者を亡くしたメスと出会ったオスもすぐに子育てに成功することがあります。

例えば青K15という2002年生まれのメスは、2回の子育てに成功したのち配偶者を亡くしたのでしょう、数年後に12歳下のオス227と番いになって3回の子育てに成功しています。227は図2で示された3歳で子育てに成功した4羽のうちの1羽です。

いくつかのエピソードを思い出します。1990年生まれのメスT15が、1992年春、塘路に縄張りを持つ成鳥のオスと交尾が見られ「幼な妻のラブストーリー」として注目されました。ところが

間もなく彼女はそこを通りかかった亜成鳥のオスとどこかへ行ってしまったのですが、翌年の3月にはまた塘路での交尾が確認されています。相手のオスが誰か、途中で変わっているのかはわかりませんが、その後も塘路で営巣し8歳で1羽の子育てに成功したのち、10歳で消息不明となりました。

また、「魔性の女」として浮名を流した1996年生まれの子メスT92は、3年連続で相手を次々に変えたのでそう思われたようですが、8歳からは2歳年下のオス34Vと番いになり、2010年と2018年に1羽ずつの子育てに成功しています。2018年の子育て（子はメス「330」）を最後に翌年4月に22歳で死亡、オスの34Vも翌年から姿をみせなくなったので死亡したものと思われま

す。新しいところでは、鶴居伊藤サンクチュアリの通信紙「ぴっけるぴっけ2021年初夏号」に載っていた記事ですが、メス138のペア相手であるオス223に横恋慕して(?)、138を執拗に追い払おうとするタンチョウの話がありました。これは若いメスのようでしたが、オスにしてみれば子育て経験のあるメス138と番いになった方がより確実な子育てが期待できますから、この若いメスが振られてしまうのも仕方ないでしょうね。こうした話を聞くにつけ、若いメスが「早く子育てしなくは！時間がない！」と言っているような気がするのです。オスとメスの気が合った上で、繁殖環境に恵まれないと子育てはうまくいかないものようです。

今回は、世代交代についての話を予定しています。

<連載> 鳥と自然と人⑪ コロナで増えた野鳥

石 弘之（本会顧問）

この2年におよぶ世界的なコロナ禍は、野鳥の世界にどんな影響を及ぼしたのだろうか。

アメリカの科学誌（9月22日付Science Advance）に寄稿された論文によると、どうやらロックダウンによって、都市の野鳥の目撃例が増えたようだ。ニューヨークなどの大都市では、街からヒトと車が少なくなるのにつれて、「珍しい動物や野鳥を見た」という情報がネットに飛び交っている。

この報告でも、ロックダウン下の鳥の移動パターンや生息場所に大きな変化が生じていることがわかった。鳥たちはロックダウンの恩恵を受けて、より多くの時間を市街地で過ごすようになった。いぜんよりも都会に現れるようになったのは、アメリカムシクイやホオジロの仲間、ミサゴやハクトウワシ、そしてカモやガンの種類だ。

これまで、都市鳥は「人間が変えた環境の影響を大きく受けている」とされてきたが、実は人流

や自動車の交通量の影響が大きいことがわかってきた。論文の執筆者であるカナダのマニトバ大学のニコラ・コーパー教授（保全生物学）は述べている。

これらのデータは、米コーネル大学鳥類学研究所らの大学研究者が中心になって、北米全域にネットワークのある「市民科学者の野鳥データベース」

（eBird）の協力で集めたものだ。430万の信頼にたる観察例が集まり、その分析から鳥たちの行動の変化がわかってきた。

追跡調査の対象になった82種の鳥のうち66種までが前年までと違う行動をとっていた。人家に近づき空港や幹線道路でもエサをとるようになった。とくに個体数の減少が激しいアメリカムシクイとホオジロ類だった。1970年代以降、北米では30億羽の鳥が減少したと推定されるが、その50%近くを占めているのがこれらのグループだ。

タンチョウ保護研究グループの最新情報をご覧ください。

ホームページ



Instagram



Facebook



<活動記録> (2021年8月~11月)

- 8月2日 会報Tancho 43号 発行
- 8月6日 運営会議(6名出席)
- 8月9日 えりも町で標識調査実施
- 9月3日 花田理事、北見市市議の浦西氏と、北見市常呂地区に計画されている風力発電所計画への対応について協議(百瀬)
- 9月3日 運営会議(5名出席)
- 9月6日 TKGNews 71号 発行
- 9月7日 環境省釧路事務所でタンチョウの保護活動方針について協議
- 9月8日 釧路湿原広里で行われる釧路市水道事業についてヒアリング
- 10月9・10日 警察と釧路市動物園が釧路空港と釧路アイスアリーナとで行ったタンチョウの交通事故防止PR活動に参加(百瀬Y)
- 10月9・10日 栗山町、長沼町、千歳市でタンチョウ生息状況調査
- 10月15日 幌延風力発電所リブレース事業の有識者ヒアリング
- 10月21日 厚岸中学校生徒の宿泊研修でタンチョウについて講話(於:MOO 百瀬)
- 10月23日 俵橋湿原でニオ作り(10名出席)
- 10月29日~11月1日 豊富町(サロベツ)でのタンチョウ標識調査に参加協力(百瀬)
- 11月5日 運営会議(7名出席)
- 11月8日 タンチョウ保護増殖検討会に参加(百瀬K、富山、百瀬Y)
- 11月12日 河川協力団体意見交換会に出席(百瀬)
- 11月13日 常呂町・地域づくり研修会(常呂・能取風力発電事業問題について)で公演(百瀬)
- 11月27日 常呂・能取風力発電事業について住民説明会に出席(於:北見市民会館 百瀬)

< 会員 > (11月 30日 現在)

会員数 : 178名 (運営会員 : 26名、個人サポート会員 : 152名 (卵114、ひな35、若鳥2、成鳥 0、終身 1))

Red-crowned Crane Conservancy (RCC) newsletter

TANCHO

Fortieth-forth issue December, 2021

<表紙写真>

撮影 : 十勝清水にて(リング392)

撮影者 : 猪股博之氏(富良野市)

認定特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ

〒 085-0036

北海道釧路市若竹町9番21号

Tel/Fax 0154-22-1993

e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp

URL: <http://www6.marimo.or.jp/tancho1213>